

Title	哲学の授業
Author(s)	青木, 健太
Citation	臨床哲学のメチエ. 2011, 17, p. 34-36
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/10046
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

哲学の授業

青木 健太

「洛星高校プロジェクト」は「高校で哲学の授業をする」という活動をしてきた。2011年度のもう半分は終わっている。問いは増えるばかり。もともと、それは哲学らしい「前進」なのかもしれない。授業とは何だろうか、何をすれば授業か、まして哲学の授業をしかも高校でするとは。

言葉の成り立ちに注目する。「授業」は「業」と「授ける」からできている。業を授けるのが授業だ。業ということがどのくらいの広がりを持っているかは定かでないが、何も教えられないことがないなら、それは授業ではない。そして、「授ける」は「授けるひと」がいることを含んでいて、「授けるひと」がいるなら「受けるひと」もいる。「授業」は「受業」でもある。授けるひと、受けるひと、業がそろってはじめて授業になる。

高校の授業なら、英語とか数学とかついで知識を業というのだろう。哲学はどうだろう、哲学は業に入るだろうか、哲学についての知識を授ければそれは哲学の授業だろうか。

哲学についての知識というのものにはある。デカルトがいつどんな本を書いて誰に反論して、何を言った。その知識が何の役に立つかわからないとしても、それは古典や数学もさして変わらないのだから問題ではない。テストもできる、空欄補充であれ記述問題であれ。ということは、点数が出せて成績評価もできる。

それは「倫理」という科目と同じだろう。わざわざ「哲学」と名乗るのであれば、それは何か別なことをしようとしているのではないだろうか。

業という言葉に戻る。業は「おこない」とか「仕事」という意味をもっている。業は「何かをする」ということに関わっている。ということは、知識を授けるということはむしろ広い意味での授業に含まれることになる。「おこない」を授けるのが狭い意味での、あえて言えば本来の授業ということだ。それならば哲学は業に入る、というよりむしろ哲学こそ業に入る。哲学は「知を愛すること (philosophy)」なのだから。

知を愛するといっても、何をすればそうなるだろうか。たとえば、知識をたくさん手に入れようとすれば知を愛

していることになるだろうか。

知識を手に入れようすることだけで知を愛することになるなら、受験生は半端ではなく知を愛していることになる。だから、彼らは哲学者と呼ばれる。こんなことはありえない。彼らは全会一致で哲学者ではない。知を愛するための方法は、それを手に入れようとするのではない。もしソクラテスが「君たちは何も知らない」と言いふらすだけだったとしたら、彼はただの変な人が懐疑的なソフィストだ。彼はそうはしなかった。彼は人々に問いかけた、「君は勇気とは何か知っているか」と。そして、問われたひとはとうとう答えられなくなって自らの無知を知る。自分のことを知る、それも自分の力で。ソクラテスはこれを大事にした。そして、彼は問いかけることによって人々の気づきを手伝った。ソクラテスが哲学者と呼ばれるなら、知を愛することとは「問い、語り合うこと」だ。

問うことをすれば何でも知を愛することになるだろうか。疑問文をつくることが問いをたてることなのだろうか。

疑問のかたちをしていれば何でも哲学的な問いというわけではない。「昨

日の夕食は何だったか」と誰かが尋ねたとしても、それは単なる事実確認でしかない。問いが哲学的であるのは、誰しもが当たり前だと思っていることにあえて疑問をもつそのとき。この問いがふつうの疑問と違うのは、あえて問おうとしなければ問いにならないところにある。誰もが当たり前前に理解してしまっていることなのだから。ほんとうはそっとしておけば上手くいくに決まっている。それにしても実際のところその当たり前が何なのかはよくわからない。だから問う。しかも自分ではわからないから誰か他のひとに問う。誰もが当たり前だと思っているのだから、そのひとも問われたところでわからない。そうやって、語り合いながらどんどんひとを巻き込む。哲学的な問いはひとを渡って誰しもが共有することができるようなものだ。

さて、そろそろ話をまとめてみよう。「高校で」ということが全然触れられなかったが、何か言えることがあるだろうか。

授けるべき業は知を愛すること。そして、それは当たり前のことを問いに変え、誰かとともに語り合うことで共有すること。授けるひとはその作法をいくらかは知っている。だから、彼が

ソクラテスになればいい。受ける人が自分で問いを見つけることができるようになるまで、手を貸す役割をすればいい。高校でこの授業をすることに意味があるかどうかは、それほど曖昧ではない。学問は「問い」ながら「学ぶ」ことなのだから。あとは業の授け方次第だ。

これから何をしようか、どんなことができるだろうか。「彼がソクラテスになればいい」といってもそれは私たちのことなのだから。問いは尽きない。私たちがしていることは哲学だ、ということの証だろうか。

(あおき けんた)

